

第1回東日本大震災津波伝承館運営協議会での意見への対応状況

資料2

項目	ご意見	対応状況
展示事業	東日本大震災津波以降様々な災害が発生しており、東日本大震災津波と他の災害で何が違うのかを解説員が学ぶことによって、解説に厚みが増してくる。	東日本大震災津波以外の災害について解説員間で共有に努め、団体見学の際に、解説するときのポイントとして、地域の特徴（過去の災害の有無、学校が避難所に指定されているのか等）を事前に押さえ、来館者に応じた解説を行うよう改善を図った。
	防災や災害教育の根底は「いのちは大切だ」ということに尽きる。伝承館が「いのちとは何か」について話し合える場所になればいい。	ゾーン3での展示解説では、自分の命を守る行動が他の命を守ることにつながることなど、具体の事例をもとに命の大切さを伝えるようにしている。
	「いのち」について情報発信することで、この伝承館の施設は生きていく。そして次には「人と人の寄り添い」が続いていく。「いのち」について発信することは、岩手や陸前高田らしさが出てくると思う。	同上
	沿岸の自治体においても、震災後に採用された職員がいて、震災当時のことを知らない職員が多くいる。行政職員も伝承館に来て学んでもらいたい。	行政や企業の研修先としても団体予約が、増えてきており、震災、防災、危機管理などを学べる施設として、研修の受け入れを行っている。
	全国の伝承館をみると、市民から忘れ去られている伝承館もあれば、中越メモリアル回廊のように活発な伝承館もあり、市民を巻き込んだ利用を考えていくことが重要である。	当初計画している年4回の企画展示に加え、地元地域協働グループと連携した展示やイベントを開催する予定である。
	今後整備される伝承施設は目的がそれぞれ違うので、お互い見て回ってもらえるよう、震災伝承ネットワーク協議会と連携して情報発信していければいい。	国の震災伝承ネットワーク協議会や3.11伝承ロード推進機構とも連携しながら、震災伝承施設の広域連携を推進していく。
教育・普及	小中高校の「いわての復興教育副読本」を一新し、伝承館について紹介している。	中高生向けの伝承ノートに加え、小学生向けの伝承ノートの作成に向け、現在作業中。
	教員を対象とした研修会を通じて、伝承館の見学について働きかけていきたい。	ご意見を踏まえ、教員現地研修会を8月に開催したところ、定員の倍以上の参加希望があったため、冬休みも開催する予定。
	子ども達が興味を持って自ら学ぶ仕掛けがあってもいい。例えば、子ども達が実際に震災伝承施設に行った証として「御朱印帳」のようなものを用意するとか。子ども達が少しでも遊び心を持つことができれば、また来ようという気持ちになり、リピーターを増やすことにも繋がっていく。	小学生の団体帰郷時には、簡単なクイズ形式を交えて解説を行うなどの工夫をしているほか、小学生向けの伝承ノートを作成して、見学時に配付する予定。
	学校現場では、伝承館に行くための交通手段は切実な問題だ。バスなどの手配ができればいい。	学校訪問の際にも同様の意見をいただいております、今後の課題と考えている。
	業種を越えてお互い伝承館に集い、学び合える施設になってくれればいい。	子供から大人、学校や観光団体、家族連れなど多様な来館者に満足いただけるよう展示解説をはじめ、受入れ態勢の一層の向上に努めていく。
広報宣伝	メディアに取り上げられた回数は、伝承館に対する社会の関心がどれだけあるかというバロメーターになるので集計しておくといふ。	新聞・テレビなど関連記事を収集し、館内で共有するよう改善を行った。
	今の子供たちは自分に興味のある動画しか見ない。伝承館の動画を発信して、それを見た人は「じゃあ実際に伝承館に行ってみようか」ということにもなる。動画発信は広報宣伝にもなり、再生数が上がればマーケティングにも活用できる。	新型コロナウイルス感染症状況下における新たな震災伝承スタイルを模索するため、各種団体と連携してオンラインでの展示解説に試験的に着手した。
	昨年度海外の旅行関係のエージェントやマスコミ系のジャーナリストの方々を三陸エリアにお連れした際、三陸の中で何を一番見せたいかと聞いたところ、共通していたのは「この伝承館だけは絶対に外せない」という話をいただいた。	観光ツアーの団体予約が増えている状況にあり、来年度の東北DCやタピック45や気仙中学校などの震災遺構の公開などの機会を捉えてしっかり対応していく。また、英語及び中国語通訳員が常駐している強みを活かしてインバウンド対応も進めていく。